

アナログ言語からデジタル言語への 言語維新と世界基軸教育

-人間の尊厳に光を与える共通言語の完成-

原田 卓

nTech講師

北海道3.0構想 発起人代表

1. はじめに	2
2. なぜ世界基軸教育が必要なのか？	5
3. 世界基軸教育とは何なのか？	8
3-1. 言語維新は、アナログ言語をデジタル言語に変容する「言語のDX」	8
3-2. 文明の弱点を補うデジタル言語	9
3-3. 認識問題にピリオドを打つ「有と無」の大逆転定義	10
3-4. 絶望を教えない教育は偽物	11
4. 世界基軸教育をどう実現するのか？	13
4-1. 「目的知・完全知」で、教育の目的を完全達成する	13
4-2. 意識を拡張する認識技術で、環境改造能力を完全獲得する	13
4-3. 心半導体を活用したPU:Personal Universeで教育経済・英雄産業が胎動する	14
4-4. 日本の仕事は、人類の見果てぬ夢である「共同体の完成」	15
5. おわりに	17
参考文献	18

1. はじめに

「社会をつくるのは人であり、人をつくるのは教育である」

世の中、何かおかしい。そんな違和感を感じ始めたのは、私が小学生の頃だ。当時、テレビで「汚職事件」という言葉を頻繁に耳にした。1988年、戦後日本最大の企業犯罪のリクルート事件、政治家や官僚たちが逮捕されマスコミを揺るがした大不祥事だ。小学校低学年だった私は「汚職事件」の意味が分からなくて「お食事券」のことだと思っていた。でもお金を持っている人たちが悪いことをした、ということは分かった。

「偉くなってお金を持つことはいいことではない」。そんな印象が私の中に残った。

「社会」について、真剣に考えたのは、大学生時代の20歳頃。就職を意識し始めるようになって、学校ではない大人社会に身を置くことがどういうことなのか、想像しようとしてもなかなか楽しい未来が想像できなかった。

学生は学校が守ってくれる感じがするけど、社会は自分を守ってくれなさそう。社会に出たら自分で身を立てていかなければならない。社会って一体何なんだろう。何なのか分からないところに放り出されて、その中で自分が生きていかなければならない。そう思った私は、まずは体験してみようと社会との接点を求めるようになった。バイト、NPOやNGOでのボランティア活動、社会人と交流できる勉強会や交流の場など、時間とお金の許す限り、興味に従って参加した。

その中で環境問題に関心を持つようになった。社会が自分を育ててくれたんだから、社会に出たら世の中に還元できる仕事をしたい。みんな地球に住んでいる訳だから、環境問題に取り組むことは大きな貢献になる。そう思って環境問題について色々調べてみると、「重要な問題だと分かっているけど、その影響がすぐに出ないから、緊急度をもって取り組むことが難しい問題」だと分かった。

数年後には必ず重要な課題になるだろうから、今から取り組むことが必要だと、やりがいを感じた私は、環境問題を解決する仕事に就きたいと思った。様々な環境団体や地方自治体、企業などを調べて、学生が携わって経験できることを片っ端からやってみた。

その中で目の当たりにしたことがあった。環境問題を解決するという大きな目標はどの団体も共通であるはずなのに、団体と団体で活動の方向性の違いや利害関係で協力ができない。また同じ団体の中でも、人間関係のいざこざがあって協力し合えない。

なぜ団体と団体、人と人は協力できないんだろう。協力できたら問題解決に向かうはずなのに、そうならない。むしろ環境問題の解決に向かいながら別の問題を生み出している。問題は減るところか、増える一方だ。なぜだろう？「それが社会っていうものだよ」「それを知ることが大人になるっていうことだよ」。そんな声が耳に入ってきたが、自分は納得ができなかった。本当にそれでいいのか？妥協して生きるのが人生なのか？妥協を覚えることが成長するということなのか？社会とはそういうものなのか？

大学3年の私には就職と進学を選択肢があった。社会への疑問、働くことへの疑問、自分の人生への疑問、生きることへの疑問、それらを抱えたまま、一旦忘れて就職して社会に出るか。疑問を疑問で終わらせない決意を持って進学するか。両親とも相談して大学院への進学を選択した。モラトリウムが2年延びるんだから、疑問にしっかり向き合う2年にしようと決めた。

指導教員に恵まれて、思いがけず海外で調査する機会を得ることができた。地球温暖化に対して、ドイツとアメリカ、タイ、そして日本で国際比較調査を実施することになった。当時、環境先進国と呼ばれていて、日本とはまったく違うヨーロッパ文化のドイツ。京都議定書から離脱したものの世界の主権を握るアメリカ。ニューハンプシャー州とアリゾナ州を訪れた。新興国であるタイ。そして我が国日本。4か国の温暖化への意識の特徴をアンケート調査で明らかにして、日本政府の取り組みへの提言を目指して修士論文を書いた。

海外での調査と研究を通じて、現地の学生や教授とやり取りすることになり、日本以外の社会に初めて触れた。日本の常識、日本の当たり前だけが全てではないことを身をもって実感した。と同時に「日本人である」ということを意識するようになった。先進国と言われる日本は、世界にどんな貢献ができるんだろう？進学した結果、これまでの疑問が解消されるどころか、逆に疑問が増えた。

国と国の力関係、利害関係があることを知って、個人一人では抗えないことがあることを知った。個人個人は、きっと誰もが幸せに生きたいと願うはずなのに、なぜ国というものが出てくると、簡単に個人の幸せを踏みにじってしまうのか。日本では戦争は起きていないから平和だと思いが、それはかりそめの平和で、本当の平和だと言えないし、実際に世界では戦争や紛争が終わっていない。なぜ人と人、国と国は争うのか。一度だけではなくて、なぜ繰り返すのか？幸せになるために存在するのが人間なのか。争うために存在するのが人間なのか。経験すればするほど、知れば知るほど、分からないことが増えた。

小学1年から感じていた「何か世の中おかしい」、その違和感は確信に変わっていた。なぜ「おかしい世の中」になってしまったのか？

大学時代の恩師が「環境問題と言うと、つつい環境が問題、環境が悪いと思いきいけど違うんだよ。人間にとっての環境問題なんだよ。環境自体は変化しているだけだから、問題とっている人間にとっての環境問題なんだよ。何事にも『人間にとっての』という枕詞をつけて考えることが大事だよ。」と言っていた。本当にその通りだと思った。社会に起こっていることで人間と切り離せるものはない。

「社会をつくるのは、人だ」

人間がつくった人間の社会。社会を変えるということは、そのまま人を変えることだ。問題を生み出すのも人間であるならば、問題を解決するのもまた人間だ。「人間とは何なのか？」やはりこの疑問を据え置きにしたまま次に進むことはできないと思った。

「人をつくるのは、教育だ」

環境問題のボランティアをしていた時に、子供達と交流する機会があった。「手を洗う時は、水道の水をちゃんと止めないとダメなんだよ」。そう無邪気にお父さんに注意する小学生を見た。何の迷いもなく素直にお父さんに言っていた。その様子に驚いた私は、その子に聞いてみた。「どうして水を止めなきゃダメって言ったの？」と聞くと、「学校で先生に教わったから。」と答えてきた。そうか、子供はこんなにも素直に言われたことをやるのか。当然と言えば当然かもしれないが、とても新鮮で衝撃的だった。

一方で、大人は頭で思っていることと行動が食い違うことがよくある。子供が真っ白なキャンパスだとしたら、そこにどんな絵を描くのか。その重要な役割を担っているのが教育だと思った。教育の影響力は大きい。それだけに怖いとも思った。人に何かを教える、そんな責任が大きくて、人の人生を左右してしまうようなこと、自分には恐れ多くてできない。そう思うと同時に、教育から目を背けることはできないとも思った。教育によって人はつくられる。

「社会をつくるのは人であり、人をつくるのは教育である」

では、教育は何によってつくられるのか？

「英語を話す時は、強気になるんだよね。」海外でフィールドワークの多い恩師が言っていた。日本語と英語を比べたら、最後まで結論が分からない日本語と、先に結論がくる英語。どんな言語を使うのかによって人の性格に影響する。「言語は世界を見る窓」(2018、平高史也)というように、言語が人生を決定づけると言っても過言ではない。

教育の根幹をなすものは言語であり、言語を抜きにして教育を語ることはできない。

「教育をつくるのは、言語だ」

「社会をつくるのは人であり、人をつくるのは教育であり、教育をつくるのは言語である。」

本論文の大前提は、この立場にある。世界基軸教育を論じる上で、「言語」というテーマは欠かせない。

また本論文の基礎となる概念や論理は、「言語維新」を掲げ、世界基軸教育を提唱する令和哲学者ノ・ジェスの学問体系からくるものである。

2. なぜ世界基軸教育が必要なのか？

画竜点睛を欠く。中国の故事だが、まさに教育の現在地は「画竜点睛を欠く」状態だ。画竜点睛は、物事を完成させるために必要な最後の仕上げを言う。「睛」は「瞳」の意味を持つ。竜の絵を描いても瞳が入ってなかったら、一番大事な肝、魂が入っていない未完の状態だ。瞳を入れて、魂を入れることで竜の絵が仕上がる。そのように、教育に魂を入れる必要がある。

先述の通り「社会をつくるのは人であり、人をつくるのは教育であり、教育をつくるのは言語である。」この立場が本論文の大前提にある。まず、私たちが生きる現代の”社会”、そして”時代”はどうだろうか。

私は北海道札幌に住んで8年になるが、8年前はお盆を過ぎると肌寒さを感じて秋の訪れを感じた。ここ数年はお盆過ぎでも蒸し暑く残暑を感じる日が増えた。気候変動、温暖化の影響を実感する。地球温暖化どころではなく「地球沸騰化」の時代が到来したと、国連のグテーレス事務総長は発言したが、2050年には地球上に人間が住めなくなるシナリオへの歩みが進んでいる。

ロシアのウクライナ侵攻は2年半が経過し、中東情勢は停戦にはほど遠い。第二次世界大戦後、核を抑止力に世界の均衡が保たれているが、万が一核戦争に発展したら人類滅亡の危機に瀕するだろう。第三次世界大戦突入へのリスクは年々高まっている。

安定しない社会情勢の中だから、個人の心の状態も当然安定しない。相手への配慮、おもてなしを大事にする日本にも関わらず、最近「カスハラ(カスタマーハラスメント)」が増加し、心のゆとりがない個人が増えている。物価高の波は着実に進み、庶民の生活は徐々に徐々に逼迫していく。知らず知らずのうちに1人ひとりへのストレスやプレッシャーが大きくなり、存在不安が膨らみ、存在孤独が公衆衛生上の問題にまで上がっている。

また津波のように押し寄せる膨大な情報の中で、情報処理が追い付かず、寝ても脳が休まらない「脳疲労」が社会問題に浮上している。さらにAIは「すでに人間の能力を凌駕しており、10年後には100万倍、20年後には1兆倍に増大する」(ソフトバンクグループ創設者・孫正義)と言われ、人間の存在意義が問われる。また、国連がSDGsを世界共通目標に掲げて、賛同する個人や団体は多くなった一方、貧富の格差は是正されるよりも拡大の方向へ向かう。

不確実で曖昧な「VUCAワールド」と世界経済フォーラムで称される現代社会の中で、とりわけ、AIの進化と人間社会への実装は、仕事を奪うことはもとより、人間の尊厳を脅かす非常事態だ。比較するものがない唯一性を尊厳とするなら、知能の面において人間は地球上でトップに君臨し続けてきた、その座をAIに明け渡すのだから、人間の尊厳は酷く傷つくことになるからだ。

なぜ、このような社会状況、時代状況になったのか。なぜ人間の尊厳の危機が訪れているのか。「社会をつくるのは、人である。」。だから、どんな「人」がこの社会状況や時代状況をつくったのか。人間に焦点を当てて、問題を深堀することが重要だ。

ノ・ジェスは「今までの叡智を極めた聖人や哲学者、科学者、数学者の本質的・究極的質問は、HOWレベルの問題が欠如していました。そのため人類はいまだ共通の問題意識を持てず、鬱・自殺・殺人・戦争の絶えない生き方を続けています。」(コラム「科学技術の次の未来技術とは」)と言う。HOWレベルの問題とは、問題意識の深さのことを言い、AからEの5段階で示される。

A: 妄想の中にはまり、注意散漫で集中できない状態

B: 思い込みにはまり、思い込みと事実の区別がつかない状態

AとBの段階は、どちらも問題意識を持てない状態である。

C: 身体の自分・存在があることが大前提、主語(S)＋述語(V)の因果アルゴリズム

に捕まったまま、つまり観点の中で思考する状態

今までの叡智を極めた聖人や哲学者、科学者、数学者も、多くはCの段階である。

D: 現実には自分の観点を投影している幻影・思い込み＝自分と自分の宇宙として捉える

ワンネス(Oneness)の状態

D段階は、違いを受け入れる相対的な和はつくれるが、究極の問題意識レベルではないため、絶対的な和のチームプレーによるイノベーションは起こせない。

5段階目のEが一番深い究極の問題意識だが、そのためには、「スクリーン概念」を取り入れる必要があるとノ・ジェスは言う。スマートフォンには、画面に映像が映し出されているオン状態と、映し出されていない真っ暗なオフ状態がある。オン状態を「映像スクリーン」、オフ状態を「バックスクリーン」と名付けるなら、Cは映像スクリーンの中の一部を、Dは映像スクリーン全体に当たる。映像スクリーンがあれば、そのペア(対称性)としてバックスクリーンがある。Eはバックスクリーンも取り入れる。

E: 1秒間で10の500乗回も映像スクリーンとバックスクリーンを行き来する振動

(動き)。映像スクリーンとバックスクリーンを行き来するスクリーンの振動

(動き)。これが現象の全体像。

E段階まで深い問題意識を持った時に、スクリーンの動きを理解して現象の全体像を捉えることができるので「どこからきて(宇宙論)、どこへいくのか(人生論)」に答えが出る。

話を戻すと、なぜ人間の尊厳が危機を迎える時代状況、社会状況になったのか？それは、これまで社会をつくってきた人の問題意識がAやB、よくてもCもしくはDに留まっていたからである。スクリーン概念を取り入れて、Eの問題意識まで人を導くことができる教育が必要だ。しかしこれまでの教育はEに導くことができなかった。なぜなのか。教育の現在地が画竜点睛を欠いていて、魂が入っていないと考える理由がそこにある。教育の魂である「言語」が不完全だったからである。思考が先なのか、言語が先なのか。これは心理言語学における「卵が先か、鶏が先か」問題である(ビオリカ・マリアン「言語の力」)。つまり、言語が人間の世界に対する理解に従っているのか、逆に、人間の世界に対する理解が言語に従っているのか、その答えは出ていないと言う。一方、「世界の限界は理解の限界であり、理解の限界は言語の限界である」とノ・ジェスは結論づけ

る。新約聖書「ヨハネによる福音書」に「初めに言(ことば)があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。」と記されている通り、言語に従って人間世界に対する理解も進化するのだ。

言語の本質的特徴は、①意味を伝えること ②変化すること ③選択的であること ④システムであること ⑤拡張的であること ⑥身体的であること ⑦均衡の上に立っていること(今井むつみ、秋田喜美「言語の本質」)だと言うが、それだけに留まらず人生を決定する最重要ファクターである。

哲学者ヴィトゲンシュタインは「語りえぬものについては、沈黙しなければならない」と哲学の終焉を宣言して言語の限界を認めた。仏教では「不立文字」として、悟りは言語で語れないとされるから、やはり言語には限界があるということだ。

人間は考える動物、言語を使って考える動物だ。言語の限界を認めることは重要である。しかし、そこに留まっていたは、限界ある存在が人間であり、その限界を持った人間がつくった結果物が今の社会だから、問題だらけで仕方ないと諦めることと同じだ。

このまま人間社会を、そして人間をギブアップしていいのか。現代社会は、人類滅亡か、未曾有の危機を解決する新人類誕生か、その分岐点だ。私の立場は、ギブアップに対して「No」だ。人類滅亡への歩みを止めることが、今の時代を生きる人間の使命であり、日本がやるべき仕事(志事)だと、私は確信する。

八方塞がりの現状に風穴を空ける重要なキーワードが「言語」である。

人間に尊厳危機をもたらしているAIと言語は密接している。「GPTに代表されるLLM(大規模言語モデル)が、研究者たちの予想を上回るほどの能力を発揮した今、彼らが次に目指しているのが、LLMにWorld Model(世界モデル)を持たせること」だと言う。AIが人間の仕事を奪い、人間の存在意義と尊厳の危機を突き付けている中、人間が使う言語のイノベーションが起きるのかどうか。言語が変わらぬままでは、人間の未来はない。

言語の限界を明らかにすること、その限界を補う新しい言語の誕生と完成、それが教育に魂を入れることであり、教育の完成である。それが世界基軸教育だ。

3. 世界基軸教育とは何なのか？

3-1. 言語維新は、アナログ言語をデジタル言語に変容する「言語のDX」

まず世界基軸教育の肝である言語の話題から始めたい。本論文で言うところの”言語”とは、日本語、英語、フランス語、中国語、韓国語などの諸言語の1つではなく、私たち人類が7万年前から使っている”言語そのもの”を指している。日本語も英語もフランス語も、私たち人類が使っている言語の共通点と限界点を明らかにしたノ・ジェスは、「SV言語」「アナログ言語」「不完全言語」だと呼ぶ。

日本語だったらまず五十音を覚える。そして「お母さん」「わたし」「太陽」など、現象に対して名前を付けられた単語を覚える。そしてそれら単語をつなげて文章にする。文章には主語(S)と述語(V)があって成立する。「私が(S)話す(V)」「太陽が(S)沈む(V)」などのように、存在(S)が、どんな動きをしたのか(V)を記述する。現象に対して名前を付けて、それらがどう変化・運動・移動するのかを記述するので「SV言語」である。SV言語で語ることができる範囲は、現象、すなわち先述の「映像スクリーンの内(なか)」に限定される。

ヴァイトゲンシュタインが「語りえぬものについて、沈黙しなければならない」と指摘した言語は、SV言語を指していると解釈すれば頷ける。また仏教の「不立文字」は、SV言語では「スクリーンの内」以外である「バックスクリーン」と「スクリーンの外」は語れないことだと理解できる。

現代は量子力学的世界観の局所実在性が認められないことが証明され、またAIはAGI、ASIへと進化を果たす。それは、数学言語によって映像スクリーンの対称であるバックスクリーンの領域、言い換えればエネルギーの領域を扱うようになったからだ。私たちが日常的に使うSV言語ではこの領域を語れない。だから、人間がSV言語を使い続けていれば、AIに淘汰される未来がやってくる。だから人間の尊厳危機を解決するためには、「言語のDX」が必要だ。

アナログ言語をデジタル言語へと、言語そのものを”変態する”のが言語のDXである。人間がアナログ言語で記述する「映像スクリーン」を「物質」、量子力学やAIの数学言語で記述される「バックスクリーン」を「エネルギー」とすれば、映像スクリーンとバックスクリーンの外側の領域は、「スクリーンの外」であり、これが「心」である。ノ・ジェスはこの領域を「純度100%心」と言い「今ここ」と名付けた。

デジタル言語は、「スクリーンの外」からスクリーンが生まれる仕組み、「スクリーンの外」から「バックスクリーン」と「映像スクリーン」が生まれる仕組みを語ることができる。言い換えれば、心・エネルギー・物質の関係性を語る言語である。詳細は省くが、心・エネルギー・物質は「1-5-1」で表すことができるので、デジタル言語は「1-5-1言語」とも言う。

またアナログ言語は、存在の動きを記述するので「存在が動く言語」である。その一方でデジタル言語は、“心の動き”によってエネルギーと物質の関係を記述するので「動きが存在させる言語」である。

約7万年前に、私たちの先祖のホモ・サピエンスが動物との生存競争を生き抜くために開発したのがSVアナログ言語だから、その性質は、競争・勝ち負け・争いの性格がある、言わば「戦争の

言語」だ。存在を大前提とした主語(S)と述語(V)は、境界線を引くので「切断言語」であり、その前提にある存在は、量子力学的世界観で立証されたように実在しないので「不確実性言語」でもある。

このように、アナログ言語はまったく完璧なものではなく「不完全言語」なのである。その限界を補完することに成功したデジタル言語は「完全言語」である。

デジタル言語は、まったく異なる次元である「心」「エネルギー」「物質」の3つを「1-5-1」というフレームワークにそって、一気かつ同時に洞察できるので、切断ではなく「つながり言語」「愛の言語」である。そして、ヴィトゲンシュタインも釈迦も、語ることができないと諦めた領域を記述することに成功した。この発明は、人類歴史上初のノ・ジェスによる偉業であり、約7万年間に渡りホモ・サピエンスが使い続けてきたアナログ言語をデジタル言語へと変容するのだから、新人類の誕生をも意味する歴史的な大事件である。

ここで改めて「世界の限界は、理解の限界。理解の限界は、言語の限界」を基準に考えていこう。世界の限界、つまり気候変動や第三次世界大戦の懸念、人間の尊厳危機などマクロ的諸問題をはじめ、職場や家庭での人間関係の悩みや個人的な悩みなどミクロ的諸問題まで、あらゆる世界の限界は、理解の限界である。

例えばロシアとウクライナでは領土への理解で相容れることができないし、夫婦や親子など身近な相手ほど理解できずに悲惨な結末になる例も多々ある。最近では「家族じまい」も起きている。それは、相手の観点や判断基準が理解できない「理解の限界」だ。その理解の限界は「言語の限界」なのである。

賞味期限切れの腐った食材ばかりを使って美味しい料理が作れないように、不完全言語・アナログ言語を使って考えるから理解の限界が生まれ、世界の限界も生まれる。

アナログ言語からデジタル言語へ言語維新が起きることによって、理解の限界からくる世界の限界は自然と解決の方向へと向かっていく。

3-2. 文明の弱点を補うデジタル言語

学生時代に環境問題に取り組んでいた時に目の当たりにした、環境団体間での争いや団体内部での人間関係のいざこざ、そして国と国、宗教と宗教での衝突など、なぜ人はいつも争い合うのか。その原因が「観点の問題」だと知った時は衝撃とともに霧が晴れた思いをした。ノ・ジェスは、観点の問題こそが文明の弱点であると指摘する。私たち人類は、一番の要所を盲点にしたまま文明を進めてきたということだ。

人間は誰も観点を持っている。そのため、相手の観点を否定すれば相手は怒り、相手の観点を肯定すれば相手に従うことになる。相手の観点を否定しても肯定しても問題が起きる。一方、自分の観点が完全、絶対に正しいと譲らなければ頑固になり人間関係に問題が生じるし、自分の観点が不完全だと思えば自分に自信が持てない。自分の観点が完全であっても不完全であっても問題が生まれる。その上、観点はみんな違うため、バラバラのままにしていると摩擦や衝突

が生じるし、逆にみんなの観点を1つに固定すれば個性が潰されてロボットやファシズムのようになってしまう。

いかなる時も人間には観点が働いているのに、その働きを自覚できず、観点到縛られて振り回されるので観点的奴隷のようなものだ。

アナログ言語は観点を固定させる。一方、デジタル言語は観点0、観点がないところから観点が生まれる仕組みを記述できるので、観点を自由自在に統制することができる。観点0から観点が無限に生まれ、アナログ言語により観点1個に固定する流れの全体を洞察可能なのである。

3-3. 認識問題にピリオドを打つ「有と無」の大逆転定義

人間とは何なのか？社会をつくるのは人だが、人間とは何かを明らかにしないまま社会をつくることは、危険なことではないだろうか。AIが開発者たちの予想をはるかに超えて進化している状況に、開発の停止を訴える動きがあるが、AIが統制不可能だと認めていることであり、AIが何なのか、知能が何なのか分からないことは危険だと言っているようものである。同じように、人間とは何か分からないことは実は危険なことである。包丁も正しく使わなければ、美味しい料理の道具ではなく殺人の道具になってしまう。

私が人間とは何かという問いを持ち始めたのは小学生の頃だが、その問いが派生して、心とは何か、宇宙とは何か、社会とは何か、なぜ人は争うのかななどの疑問を持つようになった。人間で生きているのに人間が何かを分からないままでは、人間が始まっているとは言えない。

人間は世界(宇宙)の中にいるのだから、人間とは何かを知ることは、同時に世界(宇宙)とは何かを知ることである。人間と人間の世界と宇宙とは何なのか？人間は正しく世界と宇宙を認識しているのか。人間は普遍認識を持てるのか。いわゆる「認識問題」は哲学の重要課題の1つだが、古代ギリシャの哲学者ゴルギアスの3つの証明がある。

「何も存在しない何か」を証明することはできないので、「何も存在しない何か」の存在はない。次に、仮にそれが存在するとしてもそれを認識することはできない。そして、仮にそれを認識することができたとしても、正しく言語化し伝えることはできない。私はこの3つの証明をゴルギアス・テーゼと呼ぶ(竹田青嗣「現象学とは何か」)。竹田はこれをシンプルに構図化し「存在≠認識≠言語」と示した。

これに対し近代哲学の祖・カントは、「純粋理性批判」で人間が認識できる範囲とそうでない範囲(物自体)の境界線を明確に引いた。物自体は人間には認識不可能なので「無」であり、時空間に現われるものだけが人間には認識できるので「有」であると、「有と無」の定義をした。しかし、折衷案的なこの定義では、どのように無から有が生まれるのか、時空間が生まれる仕組みの説明がつかない。また現象学の祖・フッサールは「現象学的還元」で常に「無」を認識の出発にする姿勢と態度を強調したが、「無」そのものを定義できなかった。

ここに対してノ・ジェスは、有と無を大逆転させる発想を用いる。有は「何ものにも依存せず存在するもの」であり、無は「何かに依存して存在するもの」とであると再定義する。これはSVアナログ言語では理解不可能だが、デジタル言語を用いれば容易に理解ができる。

カントが無とした物自体を、ノ・ジェスは「有：何ものにも依存せず存在するもの」と規定する。これはスクリーンの外である純度100%心であり、これだけが実在する。よって、これに依存して存在するものは無であるから、カントが有と認めた時空間は実在しないものである。しかし、現実世界が実在しないことだけに留まれば、すべては「空」と仏教的な虚無に陥りやすい。そこでノ・ジェスは「無：何かに依存して存在するもの」は、「泡沫・泡・バブル」と言う。ビールとビールの泡の関係のように、ビールの泡はビールなしには存在しえないが、ビールに溶けて消えてしまう。そのように「何かに依存して存在するもの：無：ビールの泡」は、「何にも依存せず存在するもの：有：ビール」に溶けて消える。一見すると2つがあるように思うが、2つではないし、かと言って1でもない。これを「不二一元論」とノ・ジェスは定義する。

これによって認識問題を解決するとともに、映像スクリーンを生み出すバックスクリーン、この2つを生み出す源泉であるスクリーンの外の3つを同時に洞察するデジタル言語によって、この現実を自由自在に設計することを可能にした。そして映像スクリーンである現実を、遊び感覚・ゲーム感覚・祭り感覚で楽しむことを可能にした。

3-4. 絶望を教えない教育は偽物

人間とは本来どういう存在だろうか。人間は生まれながらにして素晴らしく、無限の可能性なのだろうか。そうであるなら、なぜ人間は摩擦や衝突を繰り返し、紛争や戦争を続けるのだろうか。

「絶望を教えない教育は偽物の教育」。そうノ・ジェスは言う。確かに、人間の生には限りがあるし、酸素がなければ存在すらできない。有限で限界ばかりあるのが人間なのに、それを見逃したまま「人間は無限の可能性だ」と教えるのは、あまりに無責任なことだ。

本物の教育が教えるべき絶望とは、体験的なものではなく哲学的思惟による「正しい絶望」であり、人間は「不可能性そのもの」であることを知ることである。教育で優先して教えるべきことは、人間が無限の可能性であることではなく、「正しい絶望」であり「自分・人間は不可能性そのもの」であることだ。それを教えないから、鬱や自殺、殺人や戦争が終わらないのだ。

なぜ人間は自分に自信を持てず自己否定するのか。なぜ人から認めてもらいたい承認欲求が尽きないのか。なぜ自分を愛せず、人も愛せず、国や社会を愛せないのか。それは認識に大きな欠陥を抱えているためだ。人間は本来、誰もが完全完璧に悟っている真理そのものの存在であり、とてつもなく幸せな存在である。そのように自己規定できれば、自己否定する余地などなく、全てが満たされた心そのものになれる。

そのような認識を持てないことをノ・ジェスは「認識疾患」と呼ぶ。人間はこれまで認識疾患を患い続けてきた重篤な認識疾患の患者なのだ。その病識、問題意識を持てなかったことが実は深刻な問題だ。

病気を正確に診断できるから正確な処方方を施せるように、認識疾患を自覚して、体の自分は不可能性そのものであることを知り、正しく絶望するからこそ、認識疾患を克服して無断大可能性の自分を知り、本物の希望へ反転することができる。

誰もが完全完璧に悟っている真理そのものの存在であり、とてつもなく幸せな存在であることに気付かない認識疾患は、言語が変わらなければ解決ができない。「悟り＝差・取り」と解釈すれ

ば、映像スクリーンの内の現象に名前をつけるアナログ言語は、差を取るどころか差を生み出すばかりだからだ。

また映像スクリーンは、人間の脳によって映し出された結果物だ。人間の脳が映像スクリーンを映し出す原因である。人間の脳は、例えば視覚であれば、可視光線の範囲の波長の光しか見ることができないから、範囲外にある紫外線や赤外線を見ることはできない。ほんの部分的な情報だけをキャッチして、それが全てだと勝手に思い込むのだ。

つまり、人間の脳と五感で行う観察行為・観測行為は正確ではない。観察と観測にエラーが起きているから、そこから得たデータは当然ながらエラーになる。データエラーを元に、展開した論理も知識も学問も技術も、あらゆるものがエラーを起こしていることになる。

エラーが起きない観察・観測をするためには、基準を変える必要がある。脳機能を基準としたSVアナログ言語から、心機能を基準にしたデジタル言語を用いることによって、エラーのない観察・観測が可能になるのだ。

4. 世界基軸教育をどう実現するのか？

教育が変わることで人間が変わり、人間が変わることで社会が変わる。世界基軸教育がなかった今までの人間社会と、世界基軸教育が誕生し完成した今からの人間社会には、どんな変化がもたらされるのだろうか。

4-1. 「目的知・完全知」で、教育の目的を完全達成する

日本の教育基本法第1条には、教育の目的が以下のように記されている。

「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」

教育は、「人格の完成」を目指すことに目的がある。人間は教育を通じて様々なことを学び、知っていくが、今までの教育が提供してきた「知」と世界基軸教育の「知」にはどんな違いがあるのか。ノ・ジェスは、「手段の知・道具の知」と「目的知・完全知」に分けて説明する。

「手段の知・道具の知」は、何かを実践するための知識であり、知ることよりも実践を重視する。知は、あくまで実践のための手段であり道具なのだ。今までの教育が扱ってきた「知」はこれだった。

一方「目的知・完全知」とは、知ることだけで意味・価値が完成し、人間が完成する”究極の知”だ。人間は、どこから来てどこへ行くのか、人間の永遠のテーマである宇宙論と人生論は、「目的知・完全知」を知ることによって解決される。そうすると「剰余エネルギー」が発生するので、実践行動はまるで遊び感覚、ゲーム感覚、祭り感覚で楽しむことができるようになる。

目的知・完全知を提供する世界基軸教育は、人格の完成を”目指す”ことに留まらず、人格の完成、個性の完成、人間の完成を”完全達成”する。そしてさらに、人類未到達の境地である「共同体の完成」へと向かう”究極の実践”をも案内する。

4-2. 意識を拡張する認識技術で、環境改造能力を完全獲得する

教育の目的である人格の完成、個性の完成、個人の完成は、環境改造能力の完全獲得と言い換えることができる。環境改造能力は、ノ・ジェスにより次の5段階で示される。

1. 移動手段の改造：陸路、海路、空路など物理的環境を改造する能力
2. 通信手段の改造：電波を使って電話や携帯電話で通信する環境を改造する能力
3. 接続手段の改造：インターネットなど接続する環境を改造する能力
4. 接続の効率スピードの改造：スマートフォンなど接続する効率スピードが格段に向上する環境を改造する能力
5. 接続の”楽しさ”の改造：仮想空間であるメタバースを創造し、その中でアバターの自分を扱える環境を改造する能力

環境改造能力は科学技術によって成長してきた。科学技術が想定する環境改造は、人間と環境を分離し、人間の外側にある環境のみの改造を対象とする。その最たるものが、メタバース空間

でありAIだ。しかし科学技術によって発揮させられる環境改造能力は上限50%までだ。なぜなら、開発対象である環境の捉え方、“ものの観方”すなわち観点を置き去りにしているからである。何事にも「人間にとっての」という枕詞をつけることが必要のように、「人間の環境」と捉えるならば、環境とは「人間が脳の観点で認識した環境」なのだ。これをノ・ジェスは「環境とは感覚の結果物」だと言う。

科学技術が開発できなかった環境改造能力の残り50%は、環境を認識する側である人間そのものの開発である。科学技術が人間の外側の環境を開発し「現実を拡張」したのならば、人間の内側を開発し「意識を拡張」する技術が、科学技術の次の未来技術だと言える。これを「認識技術・nTech」として、ノ・ジェスは体系化に成功した。

「意識を拡張」するとは、人間の脳の観点の中で意識を拡張する意味ではなく、元来人間の脳の観点では認識できない領域にまで意識を拡張することを使う。認識技術は、脳の領域を超越した、脳の観点が一切入り込む隙のない「純度100%心」の領域にまで意識の拡張を起こすことを実現した。

科学技術では開発することが不可能だった人間そのものの開発、意識拡張を可能にする認識技術により、環境改造能力を完全獲得することができる。

4-3. 心半導体を活用したPU:Personal Universeで教育経済・英雄産業が胎動する

去年、北海道ではビックニュースがあった。世界最先端の半導体の製造を目指す国家プロジェクトであるラピダスの工場の建設が、千歳市で始まったことだ。新千歳空港のすぐ近くに建設中の様子を見ることができる。道内で最大18兆円超の経済効果が見込まれている。令和6年度の北海道の予算が約3兆215億円だから、約6年分の予算に相当するとんでもない額だ。しかし、このニュースに北海道民が歓喜に沸いているわけではない。

ラピダスの広報を担当する道庁の職員の方と話す機会があったが「今はみなさんに認知してもらうことに重点を置いています。その先に半導体人材の育成に力を入れていきます。」と言っていた。

かつては半導体の世界シェアの過半数を握っていた日本だが、今では韓国、台湾、アメリカに大きく水をあけられている。半導体は「産業のコメ」どころか、今や「産業の心臓」とまで言われる。半導体という素材を握っていることは、それほど重要なのだ。

IT後進国と言われる日本が、ラピダスを軌道に乗せてAI社会に食らいついていくことはもちろん重要だ。それと同時に、日本独自の路線を確立することはさらに重要だ。

環境改造能力を完全獲得し、純度100%心の動きをデジタル言語として言語化に成功したことは、新しい半導体の開発に成功したことを意味する。既存の半導体が「電気半導体」ならば、「心半導体」である。

今は小さな子供もパソコンやスマートフォン、タブレットを使いこなす。電気半導体がもたらしたものがPC: Personal Computerであり、心半導体によって発明されたのが「PU: Personal Universe」だ。1人が1台PCやスマートフォンを所有して使いこなすように、1人が1つの宇宙を所有していることを認識でき、自分の宇宙を自在にデザインできるのがPUだ。

電気半導体とPCによって情報産業が胎動し、エンジニアやYouTuberなど新しい職業が誕生していった。心半導体という新素材の開発とPUの発明は、日本独自の新産業・認識産業であり、新しい職業も誕生していく。

日本国内の内需活性化はもちろん、人類共通の問題である認識疾患を解決する心半導体は、PUを使う人が広がれば広がるほど世界の課題を解決する。勝ち負けの資本主義を根底から立て直し、win-win, all-winを実現する英雄産業となる。

かつてIT産業が日本で幕を開け始めた1970年代、北海道にはシリコンバレーならぬサッポロバレーがあった。ラピダスの小池淳義社長は、半導体関連企業や研究機関、大学が集まる「北海道バレー」を2030年までに実現しようとしている。私は、心半導体とPUを北海道に定着させて、北海道を英雄産業の中心地「北海道PUバレー」を構築したい。それが北海道3.0構想である。

4-4. 日本の仕事は、人類の見果てぬ夢である「共同体の完成」

9月の自民党総裁選を辞退し、首相を退任することを表明した岸田首相は、被爆地広島出身として、世界に向けて日本の使命を発信した偉大なリーダーだ。国連総会の演説で「教育チャンピオン」の就任を宣言し、「人類全体で語れる共通の言葉として『人間の尊厳』に改めて光を当てること」を明言した。

人間の尊厳を言語化することに成功したのが完全言語・デジタル言語だ。アナログ言語からデジタル言語への言語維新により、教育に魂を入れ教育を完成させた世界基軸教育。それが教育チャンピオン・日本が世界に普及する本物の教育だ。

1945年8月15日、昭和天皇による終戦の決断は、人類歴史上唯一無二、尊厳を全世界に体現した偉大なる実績だ。1945年8月15日は、敗戦を宣言し、骨抜きの日ではなく、自らの運命を受け入れて（アモール・ファティ）、日本の領土も、大義名分も、誇りも、全てをオールゼロ化し、倫理道徳的な勝利を収めた尊厳の出発の日、「愛と勇義の日」。そうノ・ジェスは言う。1945年8月15日をどう解釈するのかは、特に日本人にとって影響が計り知れない。全員が泥沼の中で泳いでいたら誰もその「重たさ」に気付かないように、日本人全員が1945年8月15日の十字架にかけられているようなものだ。ノ・ジェスによる1945年8月15日に対する解釈は、私たち日本人をやっと呼吸ができるようにする。そればかりか、人類で唯一の被爆国として「もう2度と戦争はしない」と決断している日本が、日本のゲームを始められるようにする。そのゲームは日本のためだけにあるものではない。国という境界線がある日本が本当の日本ではなく、境界線が無い「心の国」が日本だ。

純度100%心の世界は、無境界線だ。その世界を言語化したのが完全言語・デジタル言語だ。デジタル言語は、原始人が動物との生存競争に生き残るために開発した戦争の言語・アナログ言語とは異なり、日本の地で異国の韓国人であるノ・ジェスが嫌韓の逆風の中で、日本人とともに完成を成し遂げた「愛の言語」である。

社会をつくるのは人であり、人をつくるのは教育であり、教育をつくるのは言語である。デジタル言語により、世界基軸教育がつくられ、世界基軸教育によって個人が完成し、完成された個人た

ちがつくるのが、人類の見果てぬ夢である「共同体の完成」だ。共同体の完成は日本の仕事（志事）であり使命だ。共同体完成の出発が「宙船（そらふね）」だ。

愛の言語・デジタル言語と、愛と勇義の日である1945年8月15日、この両翼を持った日本が羽ばたき、人間の尊厳に光を与え、人類滅亡の危機を救う箱舟となる。

5. おわりに

「日本はどんな国なの?」。海外を経験する多くの人はこの質問に出会うだろう。私は23歳の時にドイツ人からその質問をされた。うまく答えられなくてもどかしかった覚えがある。日本は好きなのに、日本のことを答えられない自分に驚いた。自分は日本のことを何も知らない。少し恥ずかしい気持ちにもなった。

世界の中で日本は先進国と呼ばれている。衣食住に困る暮らしをする国もあるのに、日本に生まれたらほぼそうはならない。日本に生まれた時点でかなり恵まれているし幸せなシチュエーションだ。それなのに自分に自信を持てず、自己肯定感が低く、日本に誇りを持ってない人が多いのが現状だ。

タイを調査で訪れた時に、ラオスとの国境の山奥の村に行った。道は舗装されていなくてテレビは村長の家に1台のみ。日本とは全く違う環境に驚いた。でも最初に目に飛び込んできたのは、道のど真ん中で屈託ない笑顔で遊ぶ子供たちと、その様子を穏やかな笑顔で見守る大人たちだった。日本では子供の笑顔は見るけど、大人たちのあんなに幸せそうな表情をみることがなくて、とても衝撃的な光景だった。当時の私にはとても幸せに映った。でもその村の人たちは、日本のように物がたくさんある先進国的な暮らしに憧れていた。幸せとは何なのか、とても考えさせられた。幸せは相対的なものだった。

やるべき仕事に出会えること、仕事合わせ＝仕合せ＝幸せだ。日本には日本の仕事がある。日本にしかできない仕事がある。武士道の侍精神が根付く日本は、古来より心を感じ覚的に使ってきた民族だ。だから生死を超克した切腹や特攻ができたし、主君に忠義を立てて自らの命を捧げることができた。生死がない世界でこそ日本の本領が発揮される。個人ではなく共同体を優先して、他のどの国よりも共同体を愛してきたのが日本だ。その日本にしかできない仕事、日本だからこそできる仕事が「共同体の完成」だ。日本にはテーゼ(命題)があるのだ。

今は「日本はどんな国なの?」そう聞かれた時に、「共同体を完成する使命を持った国だよ」と自信を持って言える。知るべきことを知れば、自ずとやるべきことが分かる。だから自分を絶対自己肯定できて、自信に溢れて、日本にも誇りを持てる。そのゆとりの心で他人と世界を変えていく、やればやるほど楽しくてたまらない、笑いと言に溢れる人生は最高だ。

デジタル言語を発明して世界基軸教育を提唱し、個人完成の道と共同体完成の道を北極星のごとく示してくださるノ・ジェス先生に、心からの敬意と感謝を捧げます。

参考文献

安宅和人(2020)『シン・ニホン AI×データ時代における日本の再生と人材育成』NewsPicks/パブリッシング

池田諭(1968)『吉田松陰』大和書房

今井むつみ・秋田喜美(2023年)『言語の本質』中公新書

片桐利文(2023)『ラピダス ニッポンの製造業復活へ最後の勝負』ビジネス社

竹田青嗣・西研(2020)『現象学とは何か』河出書房新社

田中正人(2015)『哲学用語図鑑』プレジデント社

谷徹(2008)『これが現象学だ』講談社現代新書

ダン・オトゥール他(2012)『1001の出来事でわかる世界史』日経ナショナルジオグラフィック社

苫野一徳(2022)『学問としての教育学』日本評論社

ビオリカ・マリアン『言語の力』KADOKAWA

平高史也(2018)『言語は世界を見る窓』

<<http://www.flang.keio.ac.jp/plurilingualism/column003.html#:~:text=%E8%A8%80%E8%AA%E9%E3%81%AF%E4%B8%96%E7%95%8C%E3%82%92%E8%A6%8B%E3%82%8B%E7%AA%93%E3%81%A7%E3%81%99%E3%80%82,%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%8F%E3%81%93%E3%81%A8%E3%81%A7%E3%81%97%E3%82%87%E3%81%86%E3%80%82>> 2024年9月3日アクセス

日本アルプス電子株式会社(2021)『半導体は産業の「コメ」ではなく「心臓」』

<<https://www.nad.co.jp/doc/mr202109.pdf>> 2024年9月10日アクセス

貫成人(2007)『カントー私はなにを望みうるのか:批判哲学』青灯社

盧在洙(2012)『観術で生かす 日本の和心』Peace Production

盧在洙(2016)『認識革命ーイメージ言語の提案』Peace Production

ノ・ジェス(2021)『心感覚ー正しい絶望からはじまる究極の希望』イースト・プレス

ノ・ジェス(2022)『パーソナル・ユニバースー心半導体への進化』イースト・プレス

ノ・ジェス(2023)『これからの生き方 ベストビーイング』NR出版

ノ・ジェス(2023)『科学技術の次の未来技術とは』<<https://www.noh-jesu.com/2771>> 2023年9月4日アクセス

文部科学省(2006)『教育基本法』

<https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/mext_00003.html>2024年9月4日アクセス

ユヴァル・ノア・ハラリ(2016)『サピエンス全史 文明の構造と人類の幸福 上・下巻』河出書房新社

ユヴァル・ノア・ハラリ(2018)『ホモ・デウス テクノロジーとサピエンス上・下巻』河出書房新社

”孫正義氏が語る、AIの1兆倍の可能性”

<<https://gamma.app/public/AI1-cjcenzt7fi8h6te?mode=doc>> 2024年9月6日アクセス

“中島聡氏が見つけた「AIブーム」の伸び代。「GPT-4oは小学生でも解ける問題を間違える」からこそ「世界モデルを持つLLM」に投資資金が流入する”(2024年)

<<https://www.mag2.com/p/news/616309>> 2024年9月6日アクセス

”局所実在論とベルの不等式”

<<https://event.phys.s.u-tokyo.ac.jp/physlab2021/articles/1hk-9xt23/>> 2024年9月7日アクセス